素読舎新聞

編集人
村田晴彦

発行人
根石吉久

発行所
千曲市鋳物師屋
642-3
電話
090-4181-5912

「野遊び塾」準備中！

素読舎では四月から「野遊び塾」を開催予定です。

今の子どもは、以前に比べて外で遊ばなくなりました。多くの子どもは家の中でゲームばかりやっています。子どもはゲームの中の世界では主人公を自由自在に操れます。ゲームの中ではいくら刃物を振り回しても、他人も自分も決してケガをしません。ひょっとしたらゲームの外でも、簡単に刃物を使ったりすることができると錯覚してしまいかねません。頭では簡単になんでもできると思っていても、実際にはなんにもできない。そういう頭の中と身体の動かし方が切り離されてしまっている子が多くなってしまうのではないでしょうか。

素読舎の「野遊び塾」は、素読という方法を使い、「ことば」と「身体」を結びつけます。「野遊び」に必要な知識をテキストとして十分に素読した後、実際に身体を動かして実践します。参加する塾生が素読によって同じ「ことば」を共有するので、技術を持つ「先輩」が、「後輩」の面倒を見ることができます。「ことば」だけでは思いもよらなかったことが、実際に「身体」を動かす場面ではたくさん出てくるはずです。また、「身体」を動かして初めてわかることもたくさんあるでしょう。

「野遊び塾」では、最初は火を焚くことから始める予定です。最近は、焚き火をすることも行政が禁止する傾向にあるので、火の焚き方さえ生活から切り離されてしまっています。ちょっと焚き火をしようと思っても、火のコントロール方法を知らなかったら、大火事を引き起こしてしまうかもしれません。また、子どもの手の届くところにたまたまあったライターをいじっているうちに、大やけどをしてしまうかもしれません。本当に危険なこととその対処に関する知識・技術は、今では自然に覚えることではなくなっています。

世の中には頭の中だけを相手にする場所はたくさんあります。また、体だけを動かす場所もたくさんあります。けれども、「ことば」と「身体」を結びつける場所は「野遊び塾」以外にはないでしょう。

素読舎塾生の参加は基本的に無料です（バーベキューなどをする時に、材料の実費はいただきます）。

「野遊び塾」のみの参加も受け付ける予定です。ご希望の方は、素読舎までご連絡ください。

小学校の英語

中学・高校と六年間英語をやったけれど結局しゃべれない、学校でやる英語は実際には役に立たない、とはよく言われますが、それでもあいかわらず「学校英語」「受験英語」は続いています。（「学校英語」「受験英語」は、テストで点数を取るために、テストによく出る単語・テストによく出る熟語の「意味」をどれだけ詰め込むかに重点が置かれています。）

英語をものにするには、まともな音ですらすら英文を読めるようにする「音づくり」に最も力を入れなければならないのですが、学校では「音づくり」は全くと言っていいほど手をつけていません。「音づくり」をしないで、つづりと意味のみ暗記させます。音に関して言えばCDを聞かせて真似しなさいと言うくらいなものです。CDを聞くくらいで通じる音を出せるようになったら、誰でもすぐにしゃべれるようになっているはずです。

生徒に「音づくり」をしないのに、そのくせ試験には「発音・アクセント問題」なんて

いうのが出てきます。これもやっぱりテスト用の知識として重要発音とか重要アクセントとして覚えるのです。こんなふうに試験用の単語・熟語を知識をたくさん暗記している生徒が「英語ができる子」と言われたりします。「英語ができる子」にしても、ネイティヴとしゃべれるわけではありません。声を出して読んでいないもの（自分の身体を使っていないもの）は、いつまでたっても使い物になりません。

学校で「音づくり」をやらないのは、手間がかかるからです。日本語の音にかこまれた環境で、一人一人の生徒にまともに通じる音の道筋をつけていくのがどれだけ大変なことか。学校では手をつけていないことなので、この「音づくり」は一般的に軽く見られがちです。時間と手間がかかり、すぐには成果が見られないからです。でも「音づくり」なしでテストのために英語をやっていた人は、学校を卒業して、テストがなくなったらそこで終りです。そして、いつまでたっても使えないまま終わります。一方、「音づくり」をしながら自分の声に意味を溶かしこんできた人の身体には、通じる英語が残るのです。

このように、中学以上では長いこと「音」という肝心なことがおきざりにされて、使えない英語が量産されてきました。

そして今、文部科学省によって小学校にも「異文化コミュニケーション」の題目のもと、英語が導入されようとしています。

とあるモデル校では小学校では毎朝「ぐっどもーにんぐ」とあいさつするとのこと（英語の時間ではない！）。また、地元の英語ネイティヴに「ぐっどもーにんぐ」とあいさつすることが称賛されるそうです。「ぐっどもーにんぐ」はいいけれど、その後はどうするのでしょう。身振り手振りでしょうか。「ぐっどもーにんぐ」という挨拶のあとに何も準備せず、「コミュニケーション」という名のもとに、子供は英語ネイティヴという「異文化」に放り出されるのです。日本語でコミュニケーションをする訓練もしないうちに、なぜ「異文化コミュニケーション」ができるのでしょうか。あいさつ数個と、わずかの単語を覚え、楽しく・無理なく歌遊びをする程度のことで、英語でコミュニケーションができるのでしょうか。週に数時間ネイティヴと接するだけで、通じる音が獲得できるのでしょうか。

小学校でも英語が必修化されてしまうのなら、「コミュニケーション」などという言葉でごまかすのではなく、やはり通じる「音づくり」をすることが先決です。しかし今までの学校教育の流れを見れば、まともな「音づくり」はされないでしょう。

ということは早期に通じない音が身についてしまうということになります。音については、いったん変な癖がつくとそれを取り除くのに大変な労力がいります。素読舎のやってきた「音づくり」が、小学生にも必要な時代になりました。

リスニング重視の正体

去年の一一月の話です。中三の塾生が学校の総合テストがあったというので、どんなもんだったか結果を聞いてみました。

まだ答案が戻ってきていないということだったので、手応えはどうだったか聞いてみると、「あんまりよくない」、と落ち込み気味で言うのです。

この塾生は英語はいつも学年で三番以内くらいにいるので、気になりました。

どんな内容の試験だったか聞いてみました。試験時間は五〇分でリスニングが二五分あったそうです。彼の通う中学の三年の試験では、長めの長文問題が複数出題されます。今回も長めの長文問題が二問ありました。リスニングが二

五分ということは、残り二五分で長文問題に当たらないということです。全部解くのには時間が足らなかったそうです。

「他の人はなんて言ってた？」

「全然時間がないって言ってました。」

後で問題を見せてもらいましたが、時間が足りないのも仕方がないと思いました（後でわかりましたが、平均点自体がかなり低くなっていました）。

「試験でそれだけリスニングに時間を割くってことは、学校の授業でリスニングに特別に力を入れてるのかな？」

「いえ、全然なんにもやってないです。」

これにはあきれました。学校には学習指導要領でリスニング重視するというようなお達しがあるのでしょう。しかしテストでリスニングの配点だけあげればそれでいいのでしょうか。そもそも「音づくり」がきちんとできていないのなら、聞き取ることもできるわけがないのです。きちんと訓練せず、配点だけ上げて、うちではリスニングを重視しています、では生徒はたまったものではありません。

この中学の英語のテストでは、高得点のグループと低得点のグループの二極化が起こっています。現在、多かれ少なかれどこでも似たようなことが起こっているのかもしれませんが、今回はちょっとひどいと感じます。おそらく学校だけでやってきた生徒の多くは歯がたたなかったのではないでしょうか。

ここでも足りないのは「音づくり」です。生徒の「音づくり」を放っておいて、テストの配点だけ上げる。これは先生側のアリバイ作りでしょうか。

例文を五回以上言う

素読舎では、素読を原理とした方法をとっています。そのうちのひとつに「技法グラウンド」という練習方法があります。

「技法グラウンド」では、一つの例文をよどみなくなめらかに五回以上繰り返して言います。

ひところ音読がもてはやされ、英語の音読をやる場所もありますが、そういうものとは質が違います。

素読舎の「技法グラウンド」の場合、五回以上言えるようになった例文が何度もテキストにあらわれ、復習としてその後何度も何度も繰り返し五回以上言うシステムになっています。その結果、塾生は同じ例文を何百回、何千回と言うことになります。

そのくらいになると、例文が軽く口をついて出てくるようになり、口やその周りの筋肉も鍛えられて動きも軽やかになります。イントネーションや英語特有のリズムも、自然と身についていきます。同時に、塾長独自の教材により意味や文法的なこともインプットされ、身体に音と意味が深く沈澱していきます。

例文の一回や二回の音読は、やっているところはたくさんあるでしょうが、これだけ激しくやる場所は全国でも素読舎以外にはほとんどと言ってないでしょう。これだけのことをやって、やっとまともな音を獲得することができるのです。

速度にだまされない

テキストを声を出して読む練習をしていると、たまにめちゃくちゃに速く読む子がいます。口をあまり開けないであいまいな音で早く言ったりします（英語でも日本語でも）。どうも速く読むことが良いことのような雰囲気があるみたいです。それはどこから来るのか。単にネイティヴの速度で言うのにあこがれるということだけではない気がします。

何度も何度も読んで、きち

んとした音づくりをした後なら、とても言いやすくなっているはずですから、自然と速度が速くなっていくのはいいのです。けれども、そうでない場合は、どこかにごまかしがあります。速度によって、言いにくいところがすっとばされて、まるで自分はちゃんと読めているように錯覚してしまう。速度にだまされてしまうのです。これでは何回読んでも身に付きません。

スポーツでも、楽器の演奏でも、最初はきちんとしたフォームを身につけて身体を慣らしていきます。英語は「勉強」だと思われがちですが、むしろスポーツなどと同じだと考えてください。

英語の基本は「音づくり」です。素読舎ではコーチが塾生の読みの仕上がり具合をチェックします。「音づくり」という基本ができていれば、塾生はひとりで英語をやっていく力を持つことができます。

素読舎では、このようにして、ひとりひとりの進み具合を見ていきます。

「言いながら書きながら思う」

素読舎では、「言いながら書きながら思う」ことで、塾生が音と意味と文字をひとかたまりにし（「イメージ」して）、瞬時に意味が出てくるようになる練習をします。

塾長は「言いながら書きながら思う」ことで語学でやることは言いつくされると言います。

ある中学三年の塾生が、ある時期から練習の定着が非常によくなったので、書く練習をしているか、聞いてみました。

言われた通り、書く練習はしていたとのこと。ある時、テレビを見ていたら、脳科学者の茂木健一郎さんが出ていて、英語に関しておもしろい実験をしていたとのことでした。

単語を覚えるときに、ただ書いて覚えている人のグループと、声に出しながら書いて覚える人のグループにわけて、どちらがより多くの単語を覚えるかという実験でした。

無言で書いて覚えたグループは五個程度で、声を出しながら書いて覚えたグループは、二十個覚えたという結果が出たということでした。

その番組を見て、「言いながら書く」ことに科学的な裏付けがあるということがわかった彼は今までにもまして書く練習に身を入れたということです。

塾長の言う、「言いながら書きながら思う」は、茂木さんがテレビに出る前から言っていることです。茂木さんは、「言いながら書く」までは言っていますが、「思う」ことは言っていません。

音と意味と文字をひとかたまりにして、瞬間的に意味を取り出せるようにするためにはイメージ化が必要なのです。語学では、「思う」ことを積極的にする必要があるのです。

「電話でレッスン」「スカイプでレッスン」

「電話でレッスン」は、これからは生徒さんが一つの枠を二人で使ってもらうのが標準形になります。

また、電話代は、無料になりました。

今までの「電話でレッスン」は同じ場所に二人いなければできませんでしたが、スカイプというソフトを導入したことにより、北海道と九州のように、離れた場所にいる二人でも同時にレッスンが受けられるようになりました。

英語をやり直してみたい方、是非お問い合わせください。お問い合わせは掲示板「大風呂敷」までお願いします。

「大風呂敷」は、ブラウザの検索画面で、「がちがちの語学論」と入力して検索ボタンをおしていただくとたどりつくことができます。